

# 上海時期に至る沈從文の小説について 「自殺」 の主題と描写をめぐって

著者	中野 知洋
雑誌名	集刊東洋学
巻	83
ページ	56-74
発行年	2000-05-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00132552">http://hdl.handle.net/10097/00132552</a>

# 上海時期に至る沈從文の小説について

——「自殺」の主題と描写をめぐって

中野 知 洋

はじめに

一九二七年末、それまで北京を拠点に活動していた『現代評論』と、北新書局などの上海移転に伴って、沈從文（一九〇二—一八八）もまた上海に移った。しばらくして北京で行動をとみにしていた胡也頻と丁玲の二人も、沈從文を追うかのように上海に移住する。<sup>①</sup>一九二七年後半から、三年に上海を離れるまでの慌ただしい時期、沈從文の作品には、精巧な語り口と、題材の多様化が窺われ、細部まで正確に計算されたかのような厳密な構成には、小説家としての著しい進歩と成熟が感じられる。

沈從文は、上海移住後の感想を、『南行雜記』と題して『晨报副刊』に四回に分けて掲載している。書簡形式のこの文章には、北京とは甚だしく風俗や人情の異なる上海に対して、違和感と、ときに嫌悪感さえもが率直に語られる。ま

た、これに先立って書かれた『芸術雜談』『雜談』には、この時期の沈從文の文学観が窺われる。<sup>②</sup>

○私は、私の小説は自分で作るものであつて、誰かに売ろうなどと思つたことはなかつた。私は私自身の持ち物で、私の思想もまた経験が私にもたらしてくれるものにほかならず、何人たりとも金で買うことなど出来はしないのだ。いわゆる芸術家とは、誇張して名を売らなければならないものに、私などはあまりに平凡なのだ。別に他人に仕事を注目してもらわなくてもいいし、ただこの世界で生きるためだけにこれを作るのだ。<sup>③</sup>

この記述は、沈從文が「致唯剛先生」において表明した「自己に忠実な芸術」という価値観と対応するものであると思われる。「自己に忠実な芸術」とは、同時に、彼の郁達夫文学に対する評語でもある。<sup>④</sup>さらに、後の「記丁玲女士」において表明されるような、あらゆる党派に属さず、文学作

品から政治的な不純物を濾し取ろうとする姿勢も、またこの時期に胚胎するように見える。

ところで、上海に移る前後の沈從文の作品には、一見して明らかな、顕著な特徴が認められる。それは、この時期を境に、「自殺」という言葉がしばしば作品に現れるようになり、さらには「自殺」それ自体を題材とする作品が描かれ始めたことである。「自殺」の記述は、この時期の沈從文の作品の特徴をうかがうための大きな手がかりになると思われる。小論では、「自殺」の描写が沈從文作品の重要なテーマとして定着していく過程を、それ以前の作品の検討、そして作品中に見えるゲーテ『若きウェルテルの悩み』への言及を通して、明らかにしたいと思う。

# 一 日記体・書簡体小説

## —— 郁達夫の模倣について

上海時期の沈從文の作品に、「自殺」という言葉が、しばしば現れるようになることは、すでに凌宇氏によつて指摘されていた。凌宇氏は次のように述べる。

○この二年の間、沈從文の文章には、「自殺」「死亡」という言葉がきわめて高い頻度で繰り返し現れる。自叙伝

の色彩を帯びたそれらの小説、たとえば『一個天才的通信』『獄官日記』『不死日記』の主人公は、貧困・病と社会の暗黒との板挟みの中で、常に自殺という悲劇的結末を避けられないのである。これはもとより沈從文の心理や気分<sup>2)</sup>の反映である。

この指摘は、いわゆる反映論に基づくものであり、従つて例として挙げられた作品も、いわゆる私小説、すなわち作者自身の実生活とその周辺に取材したと考えられる作品に限定される。

凌宇氏によつて示された作品にはいずれも、何度も繰り返し現れる細かな原稿料の計算のように、生活の困窮に対する主人公の焦りと苛立ちが前面に打ち出されている。

『一個天才的通信』は、「世界は塵埃である」と認識する貧しい小説家が、知り合いの編集者に送った書簡の中で、売文生活に対する不安と不満を綴った作品である<sup>3)</sup>。そして読者と出版社が彼に冠した「天才」という言葉に対しては、金儲けのための広告ではないかと疑いの心が募る<sup>4)</sup>。あたかも貧しさに追討ちを掛けるように主人公の体を蝕むさまざまな病氣、例えば毎日朝晩彼を悩ませる鼻血や四人家族の肺結核（咳嗽・発熱・頭痛・不眠、苦心して捻出する葉代などは、もとより実作者の体験なしには細部にわたる具体的な記述を施すことなど不可能であろうから、凌宇氏の反映

論は、それなりの説得力を持つと思われる<sup>①</sup>。やがて生活苦と病苦に疲れ果てた主人公は、さまざまな形で自殺の願望を述べるようになり、次第にその決意を固める。

いま試みに『一個天才的通信』の中から、主人公の自殺に関わる描写を拾い集めてみると、次のようである。

○処置なしの状態になったら、あるいは本当に逃げるしか方法がないかもしれない。最初から私が立ち去ったあとの家族の混乱を想像していたわけではないが、相変わらず逃げる勇気が起きなかった。自殺もいけない。私はなお運命が私に投げかけたすべてをしつかりと手の上に擱んで、将来の暮らしを立てていかなければならない。

#### (第一信)

○私がもし自殺したって悲しむほどのことはない。私はあなたたちといっしょにこの世界に生きていたくない。もうすぐ死ぬのだ。「……」今のところ周囲は高い壁に囲まれて八方塞がり、自殺の想像で「その現実の壁を」乗り越えることも出来ず、「家族が」咳をしたり、目が痛くて涙を流しているのを見ると、海綿のように弱気になって、生きたい気持ちになりました。こうやって話しても誰も私のことなど分かるはずがない。自分自身でさえ分からないことがたくさんあるのだ。(第二信)

○私は帰宅しても「天才作家」たることの気苦労には」言及せず、喋りも笑いもせずに引き出しを開けて、鏡の破片を眺めた。先生、ご安心なさい。まだ字数に達していませんから、自殺したりするようなことはありません。退屈でいっぱいになってきたけれども、私はやはりここに座って私の生活や思想の断片を細大漏らさず書き綴ろうと思います。私は客と談笑しながらも、どうやって自分の手でこの通信に決着をつけなければならないのかを考えていた。(第三信)

そして最後に主人公は、一元八角を支払って用意しておいた鏡の破片で、自刃を遂げるのである。生と死の間で揺れ動きながら、次第に自殺へと傾いて行く主人公の心の動きが読み取れる。

『一個天才的通信』に先立つ『不死日記』は、一九二八年、上海に移って間もない沈從文が『中央日報』副刊「紅与黒」に連載した作品であるが、『一個天才的通信』と同様、実作者沈從文自身を想像させる主人公「我」が、第一人称を用いて内面の心理を告白する、日記形式の作品である。単行本収録時に書き足された続編「中年」「善鐘里的生活」を含めて、七月一日から八月末に至る二か月の日記という設定である。<sup>②</sup>『不死日記』の中で繰り返し語られている主人公の

生活上の煩悶とは、飢餓への恐怖と「女人」への欲念である。作品には初めから「死んでしまってもよい」「死了也好」などという言葉がちりばめられて厭世的であるが、その描写は『一個天才的通信』ほど深刻には見えない。「不死日記」が発表された一九二八年には、沈從文は彼を頼りに上海に転がり込んだ母親と九妹・岳萌を抱えて、彼らを養わなければならなかったのであるから、凌宇氏のように、この作品を当時の作者の自意識の反映と捉えることは、むしろ自然なことと言えるかもしれない。「女人」に対する苦悩の描写を挙げれば、主人公は七月十三日の日記から鼻からの出血のため十日間病床に就く。その間看護に訪れた若い女性を、自分の妻にできないかと夢想する。しかし貧しく老いた自分にはこのような普通の女性を妻にする術などあるはずがなく、そのようなことを口にしたら笑われるのではないかと恐怖して、自らの卑小さに心を痛めるのである。

興味深いのは、凌宇氏によって指摘されたこれらの作品が、いずれも書簡体・日記体形式の作品に限られるということである。いま沈從文の日記体・書簡体小説を通覧すると、その主題は、一貫して「金錢・名譽・女人」という言葉で表現されるように見える。このことは初期の「公寓中」

「絶食以後」以来、変化していない。そして、金錢や女性に対する渴望の思いは、彼の生活上の実感とも重なるものだったと思われる。

○私は林「宰平」先生が語ったとても深くてよいお話を覚えているが、それは、「我々は物質的な生活の面さえ維持していけたら、思想生活の面は困難なく発展するだろう」という言葉だった。しかし女性に期待するのは、度を超して欲望に固執しているということなのだろうか。私はこの面では永遠に痛々しい思いをするだろうと思う。私はいつも夢を見ることが出来るだけなのだが、その夢というのは、突然五萬元六萬元の金が手に入るというものだ、だって金があれば、女性たちが私を嫌ったりするはずがないのだから。

「金錢・名譽・女人」の主題が郁達夫に学んだものであることは、沈從文自身の記述より窺うことができる。沈從文は、郁達夫について次のように述べる。

○生活の卑しき、この卑しい生活の中で生まれる感慨・欲望の進取・失敗した後の後悔は、ひとりぼっちの若者が告白に用いる自分語りの方法によって、読者に述べられた。郁達夫という名前が『創造週報』に現れると、すぐに全ての若者の熟知するところとなった。人々は郁達夫のことを哀れな人だと思い、友人だと思ったが、それ

は彼の作品に自分の姿形を見つけたからである。郁達夫が作品の中で示したのは、当面の重要な問題であった。「金錢・名譽・女性が同盟を組んで、落ちぶれてひとりぼっちの私に攻撃をしかけてくる……」この言葉は若者の心をほろりとさせた。

ちなみに、「金錢・名譽・女人」という言葉は、郁達夫の作品の、例えば次のような場面に見える。N市の高等学校を終えて帝国大学に入学するため東京に來た主人公・伊人は、広告を見て訪れた下宿で、二十三、四歳の若い女性の接客を受けて空想する。

○「名譽は、私も手に入れた。九月からは帝国大学の学生になったのだ。金錢は、一年は支えられる。今はまだ二百八十元あまりの蓄えがそこにある。第三の要求は、女性だけということになったな。Ah, money, love, and fame!」

また別の場面では、財布が心細くなってこのときのことを思い出し、

○「名譽、金錢、婦女、いま私に何があるのか。何も持っていない、何も無い。私は……私にはこの死にそんな身体があるだけだ。」

沈從文が文壇登場以来、「文学作品は、すべて作家の自叙伝である」と述べた郁達夫の強い影響の下に作品を生み出し

て行ったことは広く知られる。「公寓中」などの初期の諸作品が、郁達夫的な「自叙伝」の模倣と実践の結果として書かれたことは明らかであって、言い換えれば、北京から上海に至る時期の沈從文の作品の中には、「公寓中」以来一貫して備えてきた特徴を、なお明確に残すものがある。一つの作品に用いられる文字の数が最初期のものに比べて大幅に増えているけれども、主人公の内面の告白に最も相応しいはずの日記体や書簡体の形式が、引き続き選択されたと言いうことができる。ただし、「自殺」の描写という観点よりすれば、日記体小説や「日記体の延長」としての書簡体小説には、これらの形式が本来的に備える特徴として、読者に物語の結末を明確に示すことが出来ないという限界がある。そのため物語の終末において主人公にどのような悲劇が訪れたのか、具体的には自殺がどのように遂行されたのかは、なお曖昧なまま残されることが多い。単行本にまとめられた『一個天才的通信』では、新たに「編者序」という枠が設けられ、主人公の死について、「死者はついに自ら予定した方法によって、鏡の破片で腕の血管を切断し、ベッドに血を流して死んだ。この知らせを、併せてここに報告するものである」という確認の説明を加えなければならなかったのである。

## 二 「自殺」意識の発生と変化について

沈從文の作品に最初に「自殺」の文字が見えるのは、「公寓中」においてである。都会の抑鬱の中で、子供のように泣いては寝て暮らすうちにいつしかすり減らしてしまった時間が「傷心」、あるいは「沈む心」「下沈的心」という言葉で表される。強い「傷心」に刺激されるたび、発作的に繰り返される手淫、手淫によって消耗する、衰弱した五尺の体軀。主人公は手淫を病と自覚し、「自殺的一種方法」として懺悔の念に駆られる。「傷心」という言葉は、さらに半月前に発表された処女作「一封未曾付郵的信」に遡ることが<sup>(21)</sup>できる。

ところで、これらのごく初期の沈從文の作品においては、「金錢・名譽・女人」の主題に取り組んだものではあっても、欲望と葛藤から、登場人物が積極的に死を選択することは、ほとんどなかったと言える。「自殺」の文字も、やむを得ぬ状況の下で反語的に用いられているのであって、主人公が積極的に死を指向するようには読めない。「絶食以後」についても同じことが言える。<sup>(22)</sup>頼りにしていた京兆尹公署の仕事を取りはぐれて、食い詰めて知人宛てに遺書すら書くけれども、文中「欲しいのは永久の空虚」だけだ。私はわざと冷静に、永遠の眠りについたのだ」とあるのは、いかにも

取って付けたようなちぐはぐな印象を免れない。かえって生への未練すら感じられるであろう。もとよりそれは、外面的な文体の未熟さや拙さと呼応する事柄であるけれども、北京で描かれた初期の作品には、荒削りながら若さや、ときにしぶとさすら窺われ、主人公がいかに病弱であつても、彼の生命が病氣や生活苦によってそのまま消滅してしまふようには感じられない。

「老实人序」に至って、主人公の空虚と煩惱が、さらに明確な形で死と結びつくようになることが窺える。「女性も金錢も、すべての希望も私のこの沈む心（「下沈的心」）を救うことは出来ない」という記述から、「金錢・名譽・女人」の主題が根底にあることが分かる。

○精神は、すでに肉体より先に死んでしまった。この本も最後の一冊とするつもりだ。力も使い果たしてしまつたし、残つたのは氣力だけだと解釈しても、まだ不十分である。生きて仕事をするのはただ自ら生きていくためだけのことで、偉人や名士達が世の中を理解しようと求めるような考えはなく、生命力を出し尽しても、やはり生活の圧力によって死んでしまふ。<sup>(23)</sup>

「老实人序」と相前後して書かれた「煥平先生」は、生活のために北京から上海に引越した貧しい小説家が主人公

の、自叙伝的な要素の色濃い作品である。<sup>(2)</sup>主人公は、自らの経験と、経験から生まれる幻想を文章にしてきた。女性に対しては臆病であり、恋愛を渴望しながらも、映画館や喫茶店や路上の車の中に華やかな女性を見かけるのは苦痛であった。主人公は、近所に引越してきた美術学校の学生と思しい若い女性に、高価な画材を買い与え、苦しい生活を助けるうちに、いつか彼女を妻にできないだろうか、と空想する。貧しくて相手にしてもらえないのなら、せめて名誉を賭けて口説くことはできないものか、と夢想する。主人公にとっての名誉とは、出版社が金儲けのために彼に冠した「天才」「名家」の称号であったが、そんなものは彼女の恋人や夫の資格とはならないことを、自身よく承知していた。女性と金銭(「窮」と名誉が図式的に配置(七八頁・九六頁)されるこの作品にあつては、時に空想される「自殺」は、自己を救出する方便として、より積極的な意味を持つように見える。

○彼は死んだほうがいいかと思った。本当にそんなに簡単に死ねるはずもなかったが、しかし思ったのだ。

「死のうと思う」、およそこのような面倒なことのために死のうと思うことが、生活に必要な思想のようなものになったのである。

死ぬことに積極的な意味が見出されたのであれば、作品

がそれだけふくらみを持つようになった、と言うこともできると思われる。この意味のふくらみこそが、上海時期に至る沈從文の作品の雰囲気の変化なのではないか、とは、恐らく多くの読者の直感するところではないか。「老实人序」や「煥乎先生」の描かれた一九二七年から二八年にかけては、まさに沈從文が北京での生活に見切りをつけて上海へ旅立つ時期と重なる。上海で書かれた「不死日記」「一個天才的通信」には、全編に亘って生への絶望と自殺への願望がちりばめられるようになることを思うと、一九二七年前後を過渡的な時期と位置づけることも可能かと思われる。

死ぬことに対する意味の変化が、この時期の作品のどのような関わりを持つのか、さらに検討を続ける。

### 三 「性漢」の形象について

#### ——「性漢」と「恋愛」

さて、「金銭・名誉・女人」の主題を扱った沈從文の作品には、この主題を自らの内面の問題として行動する典型人物が、繰り返し登場する。すなわち、主に無名か、あるいは出版社によって虚名を負わされた小説家で、年齢は三十歳前後、女性を追い求めるにはすでに「年老いた」と自覚するものの、にもかかわらず女性の肉体に対して強い欲望



と、その欲望に正面から向かい合うことのできない屈折した意識やあるいは劣等感を抱えている。内面に孕んだ種々の鬱屈した感情を、「傷心」「悲哀」と表現する人物である。ほかに虚弱体質で病氣持ちであったり、時にみすばらしい身なりや蓬髪などという特徴を付与されることもあるこの人物形象は、作品内で「怯歩者」「怯漢子」「怯漢」などと呼ばれ、様々な作品に現れては紋切り型の葛藤と悲哀を反復するのである。この典型人物は、必ずしもいわゆる私小説の中にのみ見えるわけではないが、彼の抱える主題はいつもの同じである。

もとよりこの時期には「怯漢」ばかりが描かれていたわけではない。一九二七年前後に発表された、いわゆる都市を描いた作品のうち、私小説の形を取らないものの中には、嵐生と嵐生太太（嵐生同嵐生太太）「晨」、琪生と琪生太太（早餐）など夫婦がしばしば登場して、裕福ではなくとも満ち足りた平凡な男女が描かれることがあり、彼らの存在は、あたかも「怯漢」と補完をなすごとくである。

次の文章は、アパートの中で暇を持て余した男（怯漢）が、友人から知り合いの情人を見物に出かけようと誘われる場面である。若い友人に比べて、自分のような中年男には愛情を受け入れてくれる女性などいないからと、この哀れな

申し出にしり込みする。

○その上私はもうすぐ三十だ。恋愛のようなことは本来二十歳ぐらいの若者だけの権利であるから、どんな心も生き返らせるには及ぶまい。郁達夫式の悲哀は、屋内に隠れていたって生まれてしまうのに、ため息をつきに行つて他人の伴侶を驚かす必要があるだろうか。この世の女性は、もともと私には分け前などないのであるから、見られるだけでも幸せだといえるのかもしれない。

ここで男が「恋愛」という言葉を、これを若者だけのものとして三十男の抱く女性への思いや欲望、すなわち従来の「金錢・名譽・女人」の「女人」の主題とは区別して用いていることが分かると思う。私見に拠れば、この時期の沈從文の作品の中には、「公寓中」以来続いてきた「女人」の系譜とは異なつた男女の関係や感情が描かれるようになり、そしてそれは作品の中で「恋愛」と呼ばれることが多い。「怯漢」にとつて恋愛とは、自分とは縁のない、まったく新しい形の対等な男女の関係であつて、それゆえに恋愛との巡り合ひは「怯漢」を戸惑わせることもある。

例えば、日記体小説「篋君日記」は、主人公・篋君のモノローグである。篋君には別居する妻子もあるのだが、浪費された過去に対する罪悪感の表明や懺悔など（「篋君日記自序」）、「怯漢」の特徴も窺える。下宿先の女性（嬢太太）

に横恋慕して、繰り返し繰り返し、次のように自問するのである。

○私は自問した。「これは恋愛か。」そうだ、間違いない。たとえ我々が恋愛をお互いの肉体の上に維持したとしても、やはりそれは神聖で潔白なものである。この身体のために、この美しく精緻な肉体の抱擁のために、私は生活のバランスが狂ってしまった。

これは浮気の弁解である。抑え切れぬ姨太太への劣情を、自分でもそれと気付いていながら恋愛であると決めつけて正当化を試みているのであるが、浮気は懺悔の対象となり得ても、恋愛となれば許されるあたりに、従前の「女人」の主題と「恋愛」との相違点も見出されよう。

注目すべきことに、沈從文は、「金錢・名譽・女人」を掲げた郁達夫の作品についても、郁自身が実生活において「恋愛」を手に入れたことによつて、それまでの彼の創作の動機であつた「情欲の憂鬱」（情慾的憂鬱）を失つてしまつたとしているのである。

○今日の世間の評判は、この作者に不利である。時代が向きを変えたのが一つの理由であるが、さらに大きくより自分自身に属する理由として、彼自身が創作の砦<sup>ヤク</sup>性と衝動を、恋愛によつて失つてしまつたのである。彼はもはや自分の長所である「情欲の憂鬱」の行動で自らの精

神を揺り動かすことが出来ず、彼の性格は、『情書一束』の作者のように歌いながら暮らす告白の精神も欠いているようで、恋愛詩を書きながら暮らすのに最も相応しい彼はいま、恥ずかしくなつて落ち込んでしまつたのである。

この記述に拠れば、沈從文はどうやら郁達夫的な「金錢・名譽・女人」の主題と、一般的な「恋愛」とを別のものと捉えていたように見える。また「早餐」では、子供のよう  
に妻の愛情に頼る事主・琪生を、妻があやして機嫌を取る。  
この夫婦の関係は、英国の性心理学者H・エリスの「恋愛  
とは、父性と母性の両種の要素を混じり合わせて持つもの  
である」の一句を引いて説明されている。作者が同時代の  
「恋愛」に関する様々な記述に、関心を向けていたことが窺  
える。

すなわち「恋愛」とは、それまでの「女人」のような一方的な欲望や劣等意識ではなく、時に性愛も含まれる男女の双方向的な関係と言うことができると思われる。ここで沈從文の作品に現れた「恋愛」のすべてに目を配り、多くの実例を挙げてこの言葉の表すところを帰納することは出来ないけれども、いま筆者に強い印象を与えた美しい作品によつて、その一端を示すこととする。

「第一次作男人的那个人」もまた、自らを「哀れむべき無

用の人」と思い卑しむ男(怯漢)と、娼婦の物語である。<sup>29)</sup>ある晩、一夜を共にした彼らは、性愛を通じてたがいに理解し合い、二人の間に奇妙な愛情が生じる。男は、言葉を交わさなくてもお互いの心が一つになったと感じ合えるほどのこの娼婦に、規定の四倍の、二十元の小切手を与えようとする。それは昨日ある書店から為替で送られてきたばかりの原稿料で、彼の全財産の半分に相当する金額であった。娼婦が断ると、それではこの金で、明日も、明後日も、明々後日も娼婦のところに通つて来ようと言いつつ、女は泣きながら、娼婦は人とはいえないと言われていることは分かっている。娼婦に人の心があるとしても、誰がそんな心など欲しがるだろうか。……しかし私はあなたを愛している。返事さえあれば、男に嫁ぎたいと告げるのである。男は答えなかった。何と答えてよいか分らなかった。貧しくちっぽけな自分を省みたとき、男には娼婦を汚い生活から救い出すことなど、出来るはずがなかったからである。

筆者には、恐らくはこの作品の中に、沈從文の描く「恋愛」の最も純粹で典型的な形があるのではないかと思える。<sup>30)</sup>そして、煥乎先生や篁君など一九二七年前後に多く描かれた「怯漢」形象の直面した問題とは、最初期の作品に見える「女人」への直接的な欲望や屈折した感情よりも、彼女の生活に入り込んでくる「恋愛」への戸惑い、あるいは「女

人」と「恋愛」との間の隔たりに対する煩惱であると思えるのである。

#### 四 「怯漢」と「自殺」

##### ——「ウエルテル」のことなど

沈從文作品における「自殺」の問題を考察するに当たって、まず彼の作品中に見える「怯漢」と「恋愛」とについて整理した。前章までの検討を通して、両者がしだいに同じ作品の中に現れるようになったことが示せたのではないかと思います。また一九二七年前後から、死という言葉が、必ずしも深刻な意味や、負のイメージを持たないような文脈の中で使われる傾向が窺われることもすでに述べた。

次に、「怯漢」という語の現れる小説の中で、「自殺」と「恋愛」とが言葉の上で密接に結びつくようになる過程を、作品中における「若きウエルテルの悩み」への言及という観点から、以下に検討することとしたい。

よく知られているように、『若きウエルテルの悩み』は一九二二年、郭沫若の訳によつて出版されて以来、幾度も版を重ね、多くの訳者によつて幾種もの翻訳が生まれ、広く受容された。<sup>31)</sup>その過程で、主人公ウエルテルのような恋愛と自殺は、新しい「恋愛」の典型として、次第に青年の美

生活の中に取り込まれて行ったものと思われる。

熊裕芳は、『ウエルテル』が読者を感じさせるのは三角恋愛の特色によるものであるとする。そして三角恋愛こそがゲーテの思想・芸術であるとしながらも、主人公ウエルテルが最終的に自殺によって自身の恋愛を完結させていることに注意を喚起して、青年がしばしばウエルテルの真似をして自殺しようとすることに苦言を述べる。そして作者ゲーテ自身すら幾度も恋愛結婚に失敗しながら、自殺の挙に及んだなど聞いたことがないと述べた上で、恋愛には精神の恋愛（純潔恋愛）と肉体の恋愛とがあり、純潔恋愛を守ることが出来ていたら、三角恋愛だろうと三百角恋愛だろうと、自殺など発生するはずがない、ウエルテルのように有夫の女性と結ばれて肉体の恋愛を完成することができないからと自殺に向かうのは、純潔恋愛の自殺とは言えない。恋愛中の青年がこの道理をよく知らず、ウエルテルの真似をして自殺するのは近ごろ新しい社会の道德が振るわないからである、との論を展開している。

沈従文作品に対する『ウエルテル』の影響に関しては、直接的には、本書が一九二六年一〇月に郭沫若の「引序」を付して上海の創造社出版部より再版されたことが、とりわけこの作者の注意を引いたものと見られる。『ウエルテル』への言及が、一九二七年頃に始まるからである。当時沈従

文たちの仲間うちで、ゲーテが熱心に読まれたことは、北京の公寓で彼と共同生活をしていた丁玲の次の記述によって知られる。

○北京という古都は勉強の街、文化の街であった。その時北京には『晨报副刊』があり、後にはさらに『京報副刊』が出来て、いつも著名な人たちの文章を掲載していた。アパートにいた大学生たちはみなゲーテの崇拜者、ハイン、バイロン、キーツの崇拜者、魯迅の崇拜者で、ここではいつもモーツァルト、シェホフ、イブセン、ゴーリキー、トルストイ……などが議論されていた。『……』。沈従文の作品が恋愛と死の主題を描くに当たって、『若きウエルテルの悩み』を意識したであろうと思われる記述は、様々な場面で認められる。最初に登場するのは、『簞笥日記』においてであると思われる。

○私はノートに何を書いているのだ？ ほんとに必要なもの。を。微笑や流し目、やさしく低く、振るえる言葉は、一年、十万字書いても適切に描写する術などない。私の心は複雑で、憂いでも、楽しい感情でもない。どんな文字でメモ帳に留めておくことが出来るというのだ。私は『若きウエルテルの悩み』を書いたゲーテではないし、そのような天才でもないのだ……

この段階では、『ウエルテル』は「自殺」という言葉に結び

つくものとして引き合いに出されているわけではない。感情を表現するのにふさわしい言葉が見つからず、なかなかゲーテのようにはいかないと述べているだけである。すでに確認したように、「怯漢」の登場する小説としての「篋君日記」(一九二七年七月)は、恐らくは「女人」の主題から「恋愛」へと移行する過渡的な描写によって成り立っている。事柄は、「篋君日記」が、「紅樓夢」を母胎として内外の多くの作品をつなぎ合わせた、「近代的小説にはほど遠い」語り口の作品であることにも関わると思われる。当然ながら主人公・篋君自身も、自らの葛藤や劣情が「恋愛」であるとは考えていないであろうし、従ってその言葉が「自殺」と結合して一つの類型が成り立つためには、なお若干の時間を要する。

およそ一年の後に発表された「煥乎先生」(一九二八年五月)に至ると、『ウエルテル』は、はつきりと恋愛の文脈において、その結末である主人公ウエルテルの自殺を踏まえ、たかたちで触れられる。

○ある時、友人に手紙を書いて、「ただ一度でも恋愛が頭の上に降ってきたならば、私はそのために死にたいと思う。私にはほかの勇氣は欠けているけれども、ウエルテルと同じようにすることは別に難しいとは思わないもの。」

「煥乎先生」が、主人公の美学生との精神的な関係を正面に据えていることと、自殺の連想とが無縁ではないことは、もはや明らかであろう。さらには、やや時代が下った「自殺的故事」(一九三〇年六月)に至ると、『ウエルテル』はもはや、失恋した青年の心を自殺へと導く紋切り型の形式として、コミカルな文脈で引用されるようにさえなるのである。

○誰もがおそらく知っているように、恋愛というのは障礙があつて初めて前進するのである。彼女から手紙をもらうと、私はすぐに思った。こんなことではいけない、私にはぜったい愛が欲しい。そうでなければ河に飛び込んで私の生命の意義を完成させなければ。私はそのときちょうど普通の軽薄な若者たちと同じで、好んで『若きウエルテルの悩み』を読み、自分もウエルテルになりたいたと思つた。

ここでは、『ウエルテル』は浮華な輸入物のアメリカ映画と並列され、主人公ら学生たちにとっては恋愛と自殺との結合は自明のものであった。全く実行を伴わない自殺の記述からは、言葉によるかたちだけが先行し始めたことが分かるのである。

## まとめ

以上、小論では、沈從文が上海に至る前後の作品の検討を通して、「自殺」描写が沈從文作品の中に定着して行く過程について検討を加えてきた。その過程において、「名譽・金錢・女人」の主題と「恋愛」との関係、あるいは「怯漢」の形象と「自殺」との結合が、「自殺」描写の定着という問題と密接な関係にあることを示すことが出来たのではないかと考える。

沈從文にとって「名譽・金錢・女人」の主題は、長い間頭の中から離れなかったに相違なく、はるか後になつて一九四〇年代に書かれた自作語り「水雲——我怎麼創造故事，故事怎麼創造我」の中にもこの言葉が見える。

ところで、今回の考察の及ぶ範囲が、作者の実生活とは切り離れた、虚構としての言葉の中に収まるものであることは、第一章に示した凌宇氏の文章に続く、次の言葉からも明らかである。

○沈從文自身は取り立てて自殺を企てたこともなかった。彼はなお必死にもがいて、生命の力を証明しようとして望んでいたのである。

小論は、沈從文作品を「自殺」描写という観点から考察

する際の、言わば前提となるいくつかの点について検討を加えたに過ぎず、従つて取り上げた作品も、一九二七年、すなわち沈從文が上海に移る直前の時期が中心となった。今回説き及ばなかった、上海時期に発表された「自殺」という主題をめぐる諸作品については、沈從文の描く「自殺」の様々な特徴を最もよく表していると思われる中篇小説「知己朋友」を中心に、稿を改めて考察することとしたい。

## 註

- (1) 糜華菱「沈從文生平年表」(北岳文芸出版社、一九九八年七月)。糜氏のこの記事は、おおむね沈從文「記胡也頻」(十七)、「時報」一九三一年一〇月二三日。のち「記胡也頻」上海光華書局、一九三二年六月所収)、および「記丁玲女士」六(「國聞周報」第十卷第三十四期、一九三三年八月。のち「記丁玲」上海良友圖書印刷公司、一九三四年九月所収)の記述に基づくものと思われるが、「記胡也頻」では、沈從文の抵滬を四月、丁玲と胡也頻の合流を七月とし、「記丁玲女士」の記述と食い違う。糜華菱氏は、「南行雜記」書信の日付からも、「記丁玲」の記述を妥当とする(「沈從文年譜簡編」)。「沈從文研究資料」下、花城出版社、一九九一年一月)。糜氏によれば、武漢の革命党の人間と個人的な書簡の往来があり、北京の警察から召喚と捜査を受けたため、北方軍閥の迫害を避けたことも南遷の理由であるという。なお沈從文の上

海における事跡については、小島久代氏が簡潔に整理されているほか（「胡也頻・丁玲・沈從文の上海における軌跡探訪」、『お茶の水女子大学中国文学会報』第七号、一九八八年四月、のち「沈從文——人と作品」汲古書院、一九九七年六月所収）、凌宇氏の研究に負うところが大きい（『沈從文伝』北京十月文芸出版社、一九八八年一〇月）。

(2) 自寛「沈從文」『芸術雑誌』（『晨報副刊』二二四九、一九二七年一二月）、「雑誌」（『晨報副刊』二二七二および二二三九、一九二八年一・三月）。後者は、現在最も充実した沈從文の著作目録であるキンクレイ「沈從文著作年表」（符家欽訳『沈從文伝』全訳本、湖南文芸出版社、一九九二年二月所収）に見えない。

(3) 「雑誌」（『晨報副刊』二二三九、一九二八年三月）

(4) 休芸芸「沈從文」『致唯剛先生』（『晨報副刊』一〇五、一九二五年五月）

(5) 「郁達夫張資平及其影響」（『新月』第三卷第一期、一九三〇年三月）

(6) 「從文自叙」（『現代中国文学大家集』（三）沈從文、『燕大月刊』第六卷第二期、一九三〇年五月）。なお、「海上通訊」（のち『沈從文文集』第十卷所収）と同じ号に掲載されたこの短文は、キンクレイ氏の著作目録に見えない。

(7) 「薩坡發路204号」（註（1）所掲凌宇氏書、二五〇頁）

(8) 単行本としてまとめられた『一個天才的通信』（初版は上海光華書局、一九三〇年二月。いま上海大光書局、一九三六年六月三版、に拠る）は、全体が三通の構成で、初出は、第

一信が「一個天才的通信」（『紅黒』第六期、一九二九年六月）、第二信が「寄給某一個編輯者」（『紅黒』第七期、一九二九年七月）、第三信および序文は書き下ろしと思われる。ところで、『一個天才的通信』もそうであるが、沈從文の作品には、主人公が内面的なものも含めて自らの姿を映し出す際に、しばしば道具として「鏡」が用いられる。この点については、機会を改めて検討を加えることとしたい。

(9) 「天才」という言葉について、『一個天才的通信』の中に次のように見える。

○凡そ花錢買雜誌的人一概是不能把錢花到無聊文章上面的，我写這些影響是使許多有道德的生活健康思想清楚的人青人生氣。「……」就是這樣通信，裏面沒有革命故事，沒有戀愛故事，甚至於連模倣抄襲的假天才議論也沒有，我明白，這無論如何是將增加一些對藝術過於熱心的人憤怒的。（第一信）

いわゆる「革命文学」に対して、揶揄を込めて批判を加えたものである。沈從文は『論郭沫若』（『沫沫集』上海大東書局、一九三四年四月）の中で、次のように述べる。

○創造社的基調は稿件压迫与生活压迫，所以所謂意識這東西，在当时，幾個人深切感到的，並不出本身冤屈以外。若是冤屈，那倒好辦，稿件有了出路，各人有了噉飯的地方，天才熄滅了。

郭沫若ら創造社の掲げる「革命文学」と英雄主義を、沈從文は海派文学と結びつけて軽薄な商業主義であると批判していたことはよく知られている（『論中国創作小説』、『文藝月

刊」第二卷第四号、一九三一年四月）。この作品にも、根底には「論中国創作小説」と同様の批判が透けて見えるようである。『不死日記』についても、『人間』第一期（一九二九年一月）掲載の広告には、

○書中全是作者生活的写真，不歡喜從文先生作品以為不能誇張不算英雄的；見了這書，更可以不歡喜，因為這裏是無隱蔽的說到自己平凡了。

とある。同誌の成り立ちを考えれば沈從文自身の筆による文章かと思われるが、これもまた同様の論調であることを紹介しておきたい。

(10) 賀玉波が沈從文の作品を分類した際、「作者自身の過程の日常情況」を描いた作品の中に、「蟋蟀」「往事」「我的小学教育」「卒伍」などとともに「煥乎先生」「一個天才的通信」を含めているのは凌宇氏と同じ理由によるものと思われる興味深い。同時に「嵐生同嵐生太太」「槐下鎮」「好管閑事的人」「或人的太太」「看愛人去」を「その他の題材」として一括りにするが、「その他の題材」とはその前に見える「印象的断片」と同じ謂いであって、賀玉波はこれを「空虚」であると退ける（『沈從文的作品評判』下、『現代中国作家論』第二卷、上海大光書局、一九三六年七月再版）。

なお身体のみならず丈夫でなかった沈從文が鼻血を持病としていたことはよく知られる。このことはよほど周囲の人間の注意を引いたものと見え、梁実秋は回想の中で、沈從文の印象としてわざわざ触れている（『憶沈從文』、『梁実秋文学回憶錄』岳麓書社、一九八九年一月）。沈從文の自叙伝的

な性格を帯びた作品においては、「絶食以後」以来「冬的空間」に至るまで、鼻からの出血によつて昏倒する人物の病態心理が繰り返し描かれる。

(11) 『中央日報』「紅与黒」第一四号から第一七号（一九二八年八月。のち『不死日記』上海人間書店、一九二八年一月所収）

(12) 糜華菱・邵華強両氏の年譜（註（1）所掲）を参照。岳萌はその後沈從文が教員として採用された中国公学に学生として通うことになる。「冬の空間」（『沈從文甲集』所収）は彼ら兄妹の学園生活を色濃く窺わせる作品である。なお、沈從文が当時上海近郊の呉淞にあつた中国公学で担当していた科目は「新文芸試作」と「現代文学研究」、また預科では「国文三B」を教えていたことが、学生便覧『中国公学大部一覽』（一九三〇年五月）の「中国公学大部教授一覽」によつて知られる。同年度（十八年度下学期）の学生名簿には、文史学系二年級に張兆和氏の名前も見える。この冊子に付せられた胡適「校史」は、短い文章ながら同校の沿革を知る上で重要な資料である。

ところで沈從文の中国公学における身分と、これらの講義の具体的な内容については、これまで詳らかにし得なかったが、沈從文は一九三〇年秋に校長の胡適の辞任に伴つて国立武漢大学に転任する。武漢大学の文学院長が陳源だったためと説明される（註（1）所掲糜華菱氏年表）。いま武漢大学における彼の講義「新文学研究」の内容については、武漢大学図書館にその講義録「新文学研究」（排印本）が



蔵せられ、それによつて沈從文が同校で新詩を講じていたことが知られる。また学生便覧「十九年度国立武漢大学一覽」に拠れば、沈從文の武漢転任は一九三〇年八月、身分は「助教」で、経歴には「貝淞中国公学文学系講師」とある。これらの貴重な資料は、武漢大学に留学中であつた北海道大学文学部四年の中野徹君から複写の恵を得た。ここに記して謝意を表したい。

(13) 璇若「沈從文」「南行雜記」四（「晨報副刊」二一九二、一九二八年二月）

(14) 「論中国創作小説」（註（9）所掲）

(15) 郁達夫「南遷」（『沈淪』上海泰東圖書局、一九二二年一月）  
○月所収。引用は『郁達夫文集』第一卷、生活・読書・新知三聯書店、一九八二年一月、に拠る）

(16) たとえば凌宇氏は、この時期の沈從文の小説創作の基調として、自然主義的手法を指摘した上で、さらに都市を描いた作品については、一、都市の上層階級の生活の空虚・低俗・退屈（原文「空虚・庸俗・無聊」）を描いたもの、二、孤独を痛感し、世間の同情と温かみを渴望した、惨めな精神の内面告白、と分類し、第二類の作品に「篋君日記」「長夏」「老実人」「看愛人去」を挙げる。そして、これらの作品について、郁達夫の小説の影響の明確な痕跡があると述べる（『沈從文小説の早期風貌』、『從辺城走向世界』生活・読書・新知三聯書店、一九八五年十二月、一八五頁）。

(17) 郁達夫は、日記体・書簡体小説について、次のように述べる（『日記文学』、『洪水』第三卷第三二期、一九二七年五月）。

○散文作品裏頭、最便当的一種体裁、是日記体、其次是書簡体。

我們都知道、文学家的作品、多少總帶有自伝的色彩的、而這一種自叙伝、若以第三人称来写出、則時常有不自觉的誤成第一人称的地方、如貝郎的長詩裏的破綻之類。並且縷縷直叙這第三人称的主人公的心理狀態的時候、讀者若仔細一想、何以這一個人的心理狀態、會被作者曉得這樣精細？那麼一種幻滅之感、使文学的真实性消失的感覺、就要暴露出来、却是文学上的一個絕大的危險。

○「……」此外更有書簡体小説、最淺近普通的例就如「少年維特之煩惱」、和「窮人」之類、也是和日記体一樣の便於創作、富於趣味、但是這一種書簡的体裁、我們可以說是日記体的延長、所以關於日記体的作品所說的話、是完全可以応用在書簡体的作品上面的、此地不再說了。

ここで注目されるのは、「沈淪」を初めとする郁達夫の私小説が、必ずしも第一人称の主人公を仕立てた日記体形式を取るわけではないということである。となれば、沈從文が「金錢・名譽・女人」を主題ととしても、必ずしも郁達夫の作風すべてに忠実に従つたとは言えない。沈從文がなぜ執拗なまでに日記体・書簡体小説を繰り返して書くのかは、自ずから別の問題であり、そこに沈從文の独自性を指摘することもできると思われるが、いまは郁達夫が「破綻」と退ける一人称と三人称の語り手の交替の問題が、罗兰・バルトの言う「人称の体系」に関わる事柄であつて、私小説の

物語行為においても主人公の人称が必ずしも問題にならないと述べるに止めたい(『物語の構造分析』みすず書房、一九七九年一月、三九頁)。

(18) 中川信「書簡体小説」(『フランス文学講座』第一巻「小説Ⅰ」大修館書店、一九七六年二月)。中川氏はまた次のように述べる。

○『若きヴェルテル』の場合には後半三分の二のところから編者が登場し、三人称の間接的記述によつてヴェルテルの死の経緯が物語られなければならない。これによつてゲーテの小説自体の価値は変らぬが、このタイプの書簡体小説の限界が見られるであらう。

(19) 同様に、単行本『不死日記』では、新たに劈頭に「献辞」が加えられることにより、一種の枠が形作られる。また同書に収められた「不死日記」の続編「中年」には、『中央日報』に掲載された「不死日記」が登場し、自己言及型のメタ物語の形式を取る(八月二十六日)。このように沈從文の作品、とりわけ日記体・書簡体小説の技巧として、枠物語としての性質を十分に理解し活用したものが多く見られることを指摘しておきたい。

なお余談にわたるが、長篇作品の単行本収録時の加筆について、『阿麗思中国遊記』を掲載した『新月』(第一巻第一号から第八号、一九二八年三月から一〇月)や「一個女劇員的生活」の載った『現代学生』(第一巻第一期から第五期、一九三〇年一〇月から一九三一年二月)など、いわゆる「新月派」の主宰する雑誌では、原稿が「冗長に過ぎる」のを嫌つ

て、彼の作品を途中で打ち切ることがあった。物語の全体像は単行本によつて初めて明らかにされる仕組みである。連載打ち切りを告げる編集者の素っ気なきを見て(『編輯余話』、『新月』第一巻第八号、一九二八年一〇月)、学歴のない沈從文が、「新月派」の仲間内でどのような扱いを受けていたのか窺われるように思われるのだが、これは穿ち過ぎであらうか。『阿麗思中国遊記』は、さらに書き継がれて全四巻になる計画であったというが、結果的には連載中止とともに執筆を終え、全三巻を以て出版された。

(20) 芸芸「沈從文」(『公寓中』(『晨报副鵒』一九二五年第一八号、一九二五年一月)

(21) 休芸芸「封未嘗付郵的信」(『晨报副鵒』一九二四年第三〇六号、一九二四年二月)

(22) 「絶食以後」(『晨报副刊』一二四〇、一九二五年八月)

(23) 「老実人序」(『現代評論』第七卷第一六五期、一九二八年二月。のち「老実人」上海現代書局、一九二八年七月所収)

(24) 「煥乎先生」の原題は「新夢」(『晨报副刊』二二七九から二二八八、一九二八年五月。筆名は王玖。「好管閑事的人」(上海新月書店、一九二八年七月)に収められる際に「煥乎先生」と改められた。引用は単行本による。

(25) 「怯歩者」あるいは「怯漢」の形象については、拙稿「沈從文小説における時間描写の側面——とくにその北京滞在期の作品について」(『集刊東洋学』八〇、一九九八年一月)において一部述べた。この典型人物は、第一義的には「沈淪」などに見える郁達夫の主人公の性格「cowardly」

「of」(臆病者あるいは卑怯者の意)に遡ることができると思われる。「怯漢」の特徴を備えた小説家を主人公とする作品は、「老实人」「一個晚会」「乾生性的愛」「看愛人去」「煥乎先生」など枚挙に遑がない。沈從文が繰り返しこの人物形象を生産し続けたことは驚くばかりである。

(26) 為琳「沈從文」「看愛人去」(『現代評論』第五卷第一二八期、一九二七年五月、のち「蜜柑」上海新月書店、一九二七年九月所収)

(27) 璇若「沈從文」「璽君日記」記四月二十二(『晨報副刊』二〇〇六、一九二七年七月、のち「璽君日記」北平 文化学社一九二八年九月所収)

(28) 註(5) 所掲論文。「砒性」という言葉の意味はよく分らない。『沈從文文集』第十一巻では、この二字を削っている。なお文中に言及のあった章衣萍「情書一束」は、女流作家の手で女性の大胆な恋愛を様々に描いた短篇小説集であるが(北京北新書局、一九二六年五月初版。いま「情書一束」花城出版社、一九九六年四月所収)、その描写は郁達夫に較べて「浅薄」であると評せられる(「高」長虹「情書一束」、『走到出版界』上海泰東圖書局、一九二九年三月再版)。

(29) 『小説月報』第一九巻二期、一九二八年一月一日。筆名は甲辰。のち「雨後及其他」(上海春潮書局、一九二八年一〇月)所収。韓侍桁は、「第一次作男人的那個人」など「雨後及其他」所収の作品を「退屈な事件に感じた何ほどの興趣を描いたものであり、思想は不正確で根底を欠く」とき下ろしている。この作品については、「都会の青年男女の性

の誘惑と恋愛の關係」を描いたもの、との認識からであろう、社会の進展と個人の社会に対する責任についての認識はいささかもない、と痛罵する(『一個空虚的作者——評沈從文先生及其作品』、『文学生活創刊号、一九三一年三月)。

(30) ところで、「第一次作男人的那個人」初出のわずか半月前に發表された胡也頻「紅黑出版預告」(『中央日報』「紅与黑」第四七号、一九二八年一〇月二六日)には、紅黑出版処から出版予定の近刊予告が示され、そこには丁玲と胡也頻の圖書と並んで「第一次的戀愛(小説) 甲辰著」とある。一冊の本としての『第一次的戀愛』は、実際に出版されることはなかったと見られるが(邵華強「沈從文總書目」、『沈從文研究資料』下)、広告掲載の時期がこの小説の發表と極めて近いこと、甲辰という筆名を沈從文とは使い分けている点から(『第一次作男人的那個人』の筆名と符合する)、この書名は「第一次作男人的那個人」のことを意味するか、該作品を強く意識して与えられた名前である蓋然性が高い。沈從文がこの作品に「戀愛」の名を冠しようとしたとすれば、この作品から彼の思い描く「戀愛」の具体的な形を窺ううる可能性を指摘することが出来るのではないか。

(31) 『若きウエルテルの悩み』の翻訳は、一九二二年四月に郭沫若が上海泰東圖書局から初版が上梓されて以来幾度も版を重ね、また一九二六年六月には上海創造社出版部、一九三二年五月には上海現代書局、その後上海大中書局、上海天下書店、上海激流書店からと、幾度も出版社を換えながら読み継がれている。『少年維特之煩惱』の題名に限っても、郭

沫若を初めとして羅収、凌霄、黄魯不、錢天佑など、多くの訳者によって試みられている（賈植芳・俞元桂主編『中國現代文学總書目』福建教育出版社、一九九三年一月、および上海圖書館編『中國近代現代叢書目錄』一九八二年七月、を参照）。筆者の手許にあるのは現代書局版の郭訳であるが、この本は創造社出版部の版とほとんど異同はない。郭沫若の翻訳について、熊裕芳は、国内の学ぶ者はありふれた訳よりも妥当であると認識しており、郭沫若の訳法によって生きた文字・生きた文学になっている、とする（一九二四年一〇月の日付。初出は上海『時事新報』「学燈」、いま『郭沫若論』上海大光書局、一九三六年一月四版、に拠る）。

なお遼観生「自序」（『少年維特的煩惱』上海世界書局、一九三二年一月）、宗白華「歌德的少年維特之煩惱」（『芸境』北京大学出版社、一九九九年一月）、および高橋義孝訳『若きウェルテルの悩み』（新潮文庫、一九五一年一月）を参照した。

(32) 註(31) 所掲熊裕芳論文

(33) キンクレイ氏は、一九二八年に執筆された散文詩風の書簡体小説「信」（のち『二個舞女的通信』と改題、上海大衆書局、一九三三年二月）が『若きウェルテルの悩み』の書き方を模倣したものであるとするが、未見である（ギ氏註(2) 所掲書、八五頁）。

(34) 丁玲「二個真実人の一生——記胡也頻」（『胡也頻選集』開明書店、一九五一年七月）

(35) 「冀君日記」記四月十九（『晨报副刊』二〇〇五、一九二七

年七月）

(36) 小島久代「沈從文の初期作品（一九二四—二七年）紹介」（『明海大学外国語学部論集』第一集、一九八九年三月。のち『沈從文——人と作品』所収）

(37) 「自殺的故事」（『沈從文甲集』神州国光社、一九三〇年六月）。長堀祐造訳「自殺の話」（藤井省三編『笑いの共和国——中国ユーモア文学傑作選』白水社、一九九二年六月）を参照。「自殺的故事」については、上海時期の「自殺」描写の特徴について述べた別稿（沈從文の小説における「自殺」について——「知己朋友」をめぐる）、『湘西——沈從文研究』第二号掲載予定）の中で、ふたたび触れることとする。

(38) 「水雲——我怎麼創造故事，故事怎麼創造我」（初出は『文学創作』第一卷第四期および第五期、一九四三年一月・同二月。いま『沈從文文集』第十卷に拠る）。なおこのことについては、北海道大学大学院博士課程の斉藤大紀氏から御教示を頂いた。

(39) 註(1) 所掲凌宇氏書。「虚構」という言葉については、中村三春『フィクションの機構』（ひつじ書房、一九九四年五月）を参照されたい。

(40) 「知己朋友」（『現代文学』第一卷第六期、一九三〇年二月）